

アジアの国際環境と中国の影 国際環境に関する基礎的研究-1974.10.01
学術調査報告 昭和48年度

昭和48年度文部省科学研究費補助金〔特定研究(1)〕

国際環境に関する基礎的研究

海外学術調査報告書

—昭和48年度—

「国際環境」研・海外学術調査班

まえがき

昭和48年度に発足した文部省科学研究費補助金(特定研究(1))による「国際環境に関する基礎的研究」の共同研究プロジェクトは、国際政治・国際関係論・地域研究の各専門分野の研究者による学際的かつ総合的な共同研究プロジェクトとして進行しつつあるが、この共同研究をより有益なものにするために、海外学術調査の実施が本共同研究参加者から強く望まれたのであった。それはいうまでもなく、各分野の研究に必要な新しい資料の発掘、海外各国における研究資料についての情報収集、各国の研究状況の調査ならびに各地域の現地実態調査が、本共同研究にとって不可欠なものであったからにはほかならない。

このような前提のもとで、昭和48年度においては、アメリカ班、ヤルク班、日本外交班、中国班、ソ連班、東南アジア班の六つの研究班にそれぞれ所属する18研究グループ(総括班を含む)から各研究グループ研究代表者の御協力を得て10名の海外学術調査派遣者を募り、本学術調査計画調査に見られるような総合的な研究計画に基づいて海外学術調査を実施した。ただし、初年度である昭和48年度にかんしては、予算措置上、「計画研究方式」に参加した研究者を対象とし、しかも、海外学術調査の性格上、アジア地域の研究者を中心的に人選することなどが研究代表者会議において決定され、10名のうち7名がアジア地域を対象とする研究班から選出された。

本報告書は、このようにして実施された海外学術調査の実績報告集であり、本報告書が全体の共同研究に少しでも益するところがあれば幸甚である。もとより、各調査者は、本報告書の限られた紙数に収録された以上の成果を収めているはずであり、そのような成果は、各人の個別研究はもとより、各研究班の共同研究にたいしても寄与するところ大なるものと思われる。

ところで、文部省科学研究費の補助金による海外学術調査は、従来、主として発展途上国や未開社会のフィールド・サーベイを対象にして実施要領が定められており、従って予算の使用にかんしても調査団が一方所に長期滞留して調査に従事する方式を中心に考えられたものであった。そのため、われわれのような性格の共同研究に初めてこれを適応するに際しては、たとえば調査者が個別に各国の大学・研究機関を訪問することなどにおいても、予算上また規則上さまざまな制約があるのはやむを得ないことであった。しかし、これらの点については、文部省側ともしばしば折衝を重ね、文部省側の配慮によって徐々に困難が除去されてきたことは、大変喜ばしいことである。すでに実行中である昭和49年度の海外学術調査にかんしては、この点がさらに改善を見るにいたったのである。とはいえ、各参加者(研究分担者)におかれては、予算使用上のきわめて煩雑な事務処理に御協力いただき、こうして有意義な調査を完了することができたことを深く感謝している。また、文部省大学学術局研究助成課からは、われわれの海外学術調査計画がより有効に実施されるよう、先にもその一端を記したようにさまざまな協力をいただいた。

最後に、東京外国語大学事務局にも事務上の協力をいただき、とくに会計課総務係長・河内亘氏には煩雑な金銭出納と会計事務について、庶務課庶務係長・佐藤秀夫氏には文書事務についてお手数をおかけしたことを感謝したい。また、東京外国語大学教務補佐員・伊豆見元君も、計画調査の作製や一抱えもある膨大な量の会計報告書の作製ならびに本報告書の作製にかんして、私とともにときには夜を徹して幾夜かお手伝いしてくれた。各研究グループ研究代表者諸先生の御協力とともに、これらの方々をはじめとする多くの方々の蔭の御協力があったことをここに付記し、併せて厚く感謝する次第である。

昭和49年10月1日

海外学術調査研究代表者 中 嶋 嶺 雄

目 次

まえがき

[1] アジアの国際環境と中国の影	東京外国語大学	中 嶋 嶺 雄	1
[2] イギリスおよびアメリカの第二次大戦資料について -軍事戦略史を中心に-	大阪市立大学	福 田 茂 夫	10
[3] 東南アジアを考える -資料と政治・文化の三つの側面から-	東 京 大 学	平 野 健 一 郎	12
[4] アメリカの中国研究の現状とその資料状況	アジア経済研究所	徳 田 教 之	17
[5] 台湾および東南アジア諸国の中国関係資料の現況	愛 媛 大 学	藤 井 高 美	21
[6] ソ連におけるアジア研究の現状	東京外国語大学	坂 本 是 忠	24
[7] ソ連・東欧研究の方法論 -4つのパターン-	国際情勢研究会	寺 谷 弘 壬	30
[8] ギブ・アンド・テイクの彼方の世界 -東南アジア諸国の国民形成と統合-	東京工業大学	岩 田 慶 治	34
[9] イクステンシヴ・サーベイとしての華僑研究	東京外国語大学	河 部 利 夫	39
[10] フィリピンのナショナリズムの問題	京 都 大 学	近 藤 重 克	45

<付 録>

① 昭和48年度科学研究費補助金海外学術調査 「国際環境に関する基礎的研究」計画調査			48
② 同 決 算 報 告 書			70

アジアの国際環境と中国の影

中 嶋 嶺 雄 (東外大助教授)

1 はじめに

本年度の海外学術調査計画の一環として3月1日から3月20日までの20日間、私は東南アジア・東アジア地域を訪問した。調査地域としては、まず韓国、台湾、フィリピンを訪れ、シンガポール経由で西マレーシア、旧ボルネオのサラワク・サバ両州にまで足をのばし、最後に南ベトナムを訪れて予定通り帰国した。今回の調査目的はそれぞれの地域によって異なったが、私が現在研究をすすめている戦後アジアの冷戦と中ソ関係に関連した諸問題が調査目的の一つの柱であり、もう一つの柱は、中国をめぐるアジアの国際関係の新しい変化が、アジア諸国にどのような影響をもたらしているか、に関する諸問題であった。

とくに後者に関連した問題では、去る1月に南シナ海の西沙群島事件がクローズアップされたので、かねがねこれら群島をめぐる国際紛争に着目し、2、3の論文を書いてきていた私としては、計画を若干変更して、西沙群島についての歴史的資料や文献の収集も調査目的のなかに追加した。

2 韓国における朝鮮戦争研究と現代中国研究

最初の訪問先である韓国においては、私が現在進めている中ソ関係史研究のなかの「スターリン批判」以前つまり1956年以前の中ソ関係史に関して、朝鮮戦争の諸問題、とくにその背景にあった中ソ関係の問題が、このところ未公開資料などを通じ中ソ対立の原因の一つとして考察し得る状況になりつつあるので、こうした問題をどのように追究していったらよいか、はたして韓国では、この点についての研究が進められているのか、という点に大きな関心があった。

もう一つの大きな関心は、韓国における現代中国研究の水準はどの程度のものであるか、という点にあった。この点については、昨73年11月に、「中共問題の分析評価」という統一テーマで小さなセミナーがソウルで開かれ、これは中央日報社付属東西問題研究所が主催したものであったが、その紹介などによって一応の認識はもっていたので、この点を私自身で調べてみたいと思ったのである。なお、このセミナーの発表者とそのテーマは次のとおりである。申相楚(慶熙大学教授)「中国共産党史」、趙在璠(建国大学教授)「毛沢東の支配体制」、梁興模(中央日報論説委員)「軍事力の特性」、李邦錫(建国大学教授)「対外関係史」、丁炳然(ソウル大学商大教授)「貿易と国際収支」、金潤煥(前高麗大学教授)「鉱工業と科学技術」、金相謙(延世大学教授)「農業経済構造」、高柄明(ソウル大学文理大教授)「中国の歴史思想」。

韓国は、周知のように、現在、非常に厳しい政治状況のなかにある。それについてはいろいろの意見もあろうが、それはともかく、韓国におけるアジア研究、中国研究についてみると、一つは私学の高麗大学が目すべき存在だといえよう。私自身、高麗大学アジア問題研究所長の金俊燁教授を知っていたので、今回も同教授ほか同研究所日本研究室長の韓培浩教授、政策科学研究室長の金瓊元教授らと懇談することができた。

高麗大学は、韓国の4・19学生運動の発祥地であるだけに、今日のような政治状況のなかで、とくに注目されるところであるが、現在、アジア問題研究所のスタッフもさまざまに困難な諸状況を直視しつつ研究をすすめているように思われた。このアジア問題研究所の金俊燁所長は、日本でも知友が多いと思うが、かって重慶に長くいた経験もっていて中国語にも堪能である。対日民族独立運動につくしたことで知られているが、中国史や東洋思想史などを専門としている。日本研究室長の韓教授は日本研究と政治学を専門とし、プリンストンでPh. D.をとっている。政策科学の金瓊元教授は、ハーバードでキャッセンジャーに学んだ若手の国際政治学者であり、韓国の生んだ俊秀の一人として注目されている。議論しているときにもキャッセンジャー、スタンレー・ホフマン、カール・ドイッチェなどの理論を縦横に引用するのには驚かされた。

これらの人びとが、いわば韓国におけるアカデミックな研究機関のなかではもっともハイ・レベルのグループを形

の研究状況や資料の状況などをいろいろ尋ねられたりもした。韓国国会図書館海外資料局中華課長の尹載秀氏、中国研究所事務局長の李昌順氏などである。陸軍士官学校にも中国研究をやっている外国語科長の金英讚氏がおり、日本の中国研究に大きな関心をもっていた。ただ、韓国の研究水準がまだ低い状態にあるためか、先の中央日報社付属東西問題研究所のセミナーでも、中国にたいして非常に甘い見方をしているような発言も目立ち、この点でも、北朝鮮にたいしては厳しいイメージをもっているのにくらべ、中国にたいしては逆に甘い認識に陥っているようにも感じられた。毛沢東の延安精神についての論文も1、2あるのだが、その精神主義的な側面にある意味で同調するような感じが目立ったように思われる。

なお、韓国では日本大使館の岡崎久彦参事官にとくにお世話になり、最近の内外情勢について有益な意見交換ができたことをつけ加えておきたい。

3 台湾認識と中国大陸研究

次に台湾についてだが、その詳細については、本学術調査で台湾の研究状況についてとくに集中的に調査された藤井高美教授（愛媛大学、今堀班）の報告にゆずるとして、台湾の現況にかんする私の印象から述べるなら、全般的な状況はいわば“生存の戦略”が成功して、逆境のなかから新たに立ちあがり、一つの可能性を見出しはじめているように感じられた。私自身、中国研究者でありながら、これまで台湾については認識不足な点があり、とくに台湾南部の農村地帯などを訪れたことさへなかったのだが、今回の調査旅行では、台湾滞在中の前半を高雄、台中、台南周辺の農村訪問に費し、また、バスや汽車に乗りついで東海岸の花蓮、蘇湾にまで行って台湾の農山村の実態にふれることができたのは大きな収穫であった。このような旅程は、必ずしも、今回の研究テーマと直接関係があるとはいえないが、そのことによって、私自身の認識に様々な新しい発見をつけ加えることができたように思う。とくに、私自身、出発前に「中ソ対立と台湾の将来」と題するレポートを書きあげたばかりであったので、私には有益な旅行であった。そうした経過を経て新たに再認識ないしは発見した点は次の3つに要約できる。

一つは、台湾は中国だというよりは、やはり台湾は台湾であるということの再認識であり、おそらく台湾は、今後、そのような道をたどってゆくであろうことを強く感ぜざるを得なかった。

二つは、台湾はたしかに自然条件や地理条件を考へても Formosa「宝の島」だという印象である。私は、中国を訪問した経験をもっているが、中国と比較してもこのことはいえるように思う。現在の台湾は、石油・エネルギー資源の問題などで、ボトル・ネックをもってはいるが、この点は、サウジアラビア一國が台湾に友好的であるだけでも十分に救われるのであるから、やはり将来的にも「宝の島」であるといえよう。皮肉な見方をすれば、このような台湾のメリットを中国自身を知っているだけに、中国は台湾解放を唱えつづけるのだともいえよう。

第三には、初めてこの眼で見て知った事実であるが、台湾島は地政学的に見て、まったく見事な要塞だということである。ことに花蓮から蘇湾港に至る東海岸に行ってみると、そこは大変な断崖絶壁が海岸線になって続いており、たとえ台湾を武力解放するとしても、この方面からの攻略はまったく不可能だということの実感を味わった。この点で台湾は西側の海岸線だけを中心的に防衛すればよいということになる。以上の3点は、台湾とその将来を考えるうえで基本的なポイントではなからうか。

旅程の後半は、中国研究の問題に取り組み、木柵の国際関係研究所、中国文化学院、国立政治大学、交流協会などを訪れた。中国文化学院のなかには韓国研究所があって、ここには助教授として先述の韓国人若手研究者の朴斗福氏がいる。彼は、“朝鮮戦争と中国”との関係を専門的に研究しており、一夜、私のホテルを訪れてくれたので、当時の毛沢東とスターリンの関係などにつき、興味深く議論することができた。

私は彼に、台湾にいる外国人研究者として、台湾における中国研究の資料センターとしては、今日、どこが重要であると思うかと質問したところ、彼は、貴重な資料センターの順位を即座に次のように列挙してくれた。第一は、司法行政部の調査局であり、第二は国防部情報局であり、第三は、中国国民党大陸工作組、第四が安全局だということである。有名な中華民国国際関係研究所（理事長・杭立武氏）について尋ねると、同研究所は必ずしも独自の資料センターではなく、重要資料については右の各センターから資料を借り出して研究しているとのことであった。国際関係研究所は、研究調査機関、諸外国の研究者との交流の場としての意味を第一義的もっているように思われる。

るのかどうかについては、二つの見方がある、はっきりしたことはわからない。

次にこの問題に関連して、西沙群島・南沙群島の問題に移るが、従来、フィリピンは、第二次大戦後のキノ大統領の時代からこの領域の領有権の主張をしはじめていた。しかし、最近までは、大きな関心がなく、トマス・クロマというこの海域のボスであり、大船主でもある人物（彼は国会議員でもある）が私的な領域として、南沙群島を開発しようとし、そこを『夢の島』にしようとしているいろいろな開発計画をもっていただわれている。しかし、この群島群が国際紛争になるにつれて私的なレベルの領有権主張ではだめなのでようやく政府がのり出してきたというのが現状である。なお、フィリピン側からするこれら群島群についての資料としては、この問題を特集した『New Philippines』1974年2月号が有益である。

第四に、フィリピン大学のアジア・センターの印象については、本学術調査で平野健一郎助教授（東大、衛藤班）が詳しく報告されており、また村上公敏教授（桃山学院大、河部班）の詳しい印象記もあるので（『アジア時報』1974年2月号）、詳細はそれらにゆずるが、私の訪問に際しても同研究所秘書長のF・サニエル女史が親切に対応してくれた。このアジア・センターは（その概要については、同研究センター発行の小冊子『The Asian Center』を参照）、おそらくフィリピン唯一のアジア研究センターとして女子大学院生などを使って非常によく資料が整備されているが、ただ、クオリティの問題になると、ここでスクラップしている記事はフィリピンの『ヘラルド・トリビューン』などの新聞中心の切り抜きであり、必ずしも高度の情報・資料センターだとはいえないように思われる。

また中国関係の切り抜きをみても、Peking ReviewやChina Reconstructs, Current Sceneのような英文出版物だけなので、フィリピンにおける唯一のアジア問題研究センターとしては、まだまだ中国研究の出発点に立ったところだという感じをもたざるを得なかった。そういう意味で、一つのセンターではあるが、今後待つところが大きいといえよう。なお、このアジア・センターは建物の新築とともに近く改組されるということであった。余談であるが、私の訪問の1週間前、衛藤浩吉教授（東大、衛藤班）がこのアジア・センターで講演されたとのことであり、なかなか好評であった由である。

5 ポルネオでの体験と中国の影

次に、今回の調査の大きなポイントの一つである旧ボルネオのサラワク、サバを訪問した。一口にいうと、西マレーシアのこの両州には中国人が非常に多く、クテン、シブ、ミリ（以上、サラワク州）、コタキナバル、サンダカン（以上、サバ州）の都市はもとより、農村地帯やジャングルの奥までいっても中国人が多いのには、いままらながら多くを考えさせられた（このことについての印象は、拙稿「ボルネオ雑感」、本プロジェクト『ニュース・レター』第3号、参照）。たとえばサラワク州全体の人口構成をみても、陸ダヤ族・海ダヤ族ほかの原住民以外は、ほとんど潮州人、広東人、客家、福建人などの中国人である。中国人が人口構成の32.7パーセントを占め、この比率はクテンのような都市になると倍以上になり、マレー人は17.9パーセントで第4位を占めるにすぎない（1966年の調査、M. G. Dickson, "Sarawak and Its People", 3rd edition, 1968. 参照）。

クテンに着いた日は、一種の道教信仰である広沢尊王生誕千年祭のお祭りで、街中をあげて、籠の踊りをしたり、西遊記や楊貴妃の出し物があったり、ドラや太鼓をならして大賑わいであった。夕闇迫るころ長くて太い線香を手手にやってくる中国人の“信男善女”の大行列があったが、その静々とした迫力がまた圧倒的であった。

潮州公会や福州公会などの同郷会や宗親会が中心にこうした催し物を行っているわけであり、ボルネオのこの地にも中国文化がこうして強烈に、しかも排他的に根づいていることの意味をつくづく考えさせられた。

一口に華僑問題とわれわれはいうが、マレーシアの国民形成と統合において、この問題はいったいどうなるのか、実に大変な問題だということを改めて感じた次第である。

それとの比較で、かつては首狩り族だといわれていた陸ダヤ族の居住している Long House（原始的ながらきわめて合理的に集団生活の智慧を働かせた竹製の長屋住居で、彼らは部族間の襲撃にそなえて、そこに共同生活をおくっている）をジャングルの奥まで半日かかって訪れてみたが、現在では、ダヤ族の男性は都市で働いている者も多く、むしろダヤ族の方が、ここ数十年の間に、かなり急速に開明化され、新しい生活様式に順応しはじめているのに対して、かえって中国人の方が、より伝統的・旧守的ではないかと感じた次第である。

この背景には、南シナ海の海洋覇権をめぐる中ソ対立があるのではないか、という私の仮説（詳しくは拙稿「西沙・南沙群島事件の国際的背景」、『世界週報』1974年2月26日号、参照）については、現地の日本大使館筋は、全然このようには思っていないのだが、ベトナム側はみなそう思っているようであった。つまり、最近のソ連と中国の海洋戦略の対立とこの問題とは非常に大きな関係があるという見方である。

西沙群島については、中国、ベトナムの両国ともいろいろと主張すべき点があると思う。しかし、少なくとも、南沙群島に関しては、中国は、とても主張すべき根拠をもたないというのが私の辛直な感じである。ただ、ベトナム側は、西沙群島についても、ユエ王朝時代やフランス統治時代のフランス政府の官報などの古い資料を見せてくれて、昔からここはベトナム領だったということを強く主張しており、今日、ベトナムは力では中国に屈してしまったが、この群島の紛争は、海洋権やソ連の海洋戦略、それに資源の問題ともからんで今後の長期的な問題になってゆくであろう。

この点でとくに注目されるのは、ハノイが、そして当然のこととはいえソ連が、この問題について、中国を支持していないということである。私の印象では、ソ連自身も、いわば南北ベトナムの現状固定化の方向へ動き出しているように思われ、このことがこの小さな群島の事件を通して、暗に南ベトナムを支持するというかたちで出はじめているようにも思われる。なお、西沙群島の紛争について南ベトナムのさる高官が私に中国の今回の攻撃に際し、米中間には暗黙の了解があったのではないかと語っていたことが注目されよう。その意見は、去る74年1月中旬の中国の突然の軍事行動の3日前に、それまでこの海域にいた米第7艦隊が西沙群島周辺から撤退したという謎の多い行動に基づくものであり、一般にはまったく報ぜられなかったこの情報は、きわめて重要なものであるように私には思われた。

以上、ごく短期間の調査旅行ではあったが、私にとって、それはきわめて有益な旅行であったように思われる。

【付】 ベトナム民主共和国国立図書館所収の西沙群島・南沙群島関係資料収集リスト

- 1. "Les îles Spratle y" của B.B., L'Asie française, số 369, tháng 4/1939.
- 2. "Les îles Paracels et la sécurité de l'Indochine, une lettre de M. Pasquier" của H. Cucherousset, L'Eveil économique de l'indochine số 685, 10.05.1931.
- 3. "L'indochine aux Paracels" của H. Cucherousset, L'Eveil Economique de l'indochine, số 688, 31.05.1931.
- 4. "Les îles Paracels" của Gustave salé, L'Eveil Economique, số 705, 27.09.1931 (bài này có đăng trong, L'Avonir du Tonkin số 10495, 17.04.1931).
- 5. "Iles Paracels" của Olivier A. Saix, Terre Air Mer La Géographie. Paris, Tome LX, Novembre Décembre 1933.
- 6. "L'histoire moderne des îles Paracels" của Lacombe, L'Eveil de l'Indochine, số 738, 22.05.1932.
- 7. "L'histoire moderne des îles Paracels", P. Pasquier, L'Eveil de l'Indochine, số 741, 12.06. 1932.
- 8. "Histoire moderne des Iles Paracels" của H. Cucherousset, L'Eveil de l'Indochine. số 744, 03.07.1932.